物理主義の下での重ね描き多元論（その 2･･･緑内障）

金沢大学名誉教授
柴田正良
Nov. 13, 2022
於：JAIST 金沢駅前オフィス

道徳的行為者のロボット的 構築による
＜道徳の起源と未来＞に関する学際的探究」（基盤研究(A) 19H00524）

章立て：
1. 緑内障というより、感覚知覚一般の機能限界と機能劣化
2. 一人称報告（クオリア報告）の訂正不可能性（？）
3. 感覚知覚相互の関係と物理主義
4. 重ね描きによって一人称的世界を抜け出せるか？
おまけ：「幻覚」の定義の試み

1. 緑内障というより、感覚知覚一般の機能限界と機能劣化

ここで問題にするのは、もちろん、緑内障という眼の病気に特化した話ではなく、感覚知覚一般の機能限界と機能劣化による一人称的経験描写の変化・変質である。緑内障をわざわざ選んだのは、私（筆者）が現在こうむっている病であるがゆえに、視覚の変質を比較的正確に記述できるからである。

遠くにある四角い塔も、ここから見れば円い筒にしか見えない。赤の色眼鏡をかければ、白い桜もピンクの花になる。それこそ新型コロナに罹れば、味噌汁もコーヒーも味がなくなることもあるようだ。一人称的な経験描写は、経験された限りの内容を誠実に報告する限り、物理描写からの修正を受け入れる必要はない。「そう見えたものはそう見えたのだ」。考えてみれば、そもそも「正しい感覚」とか、「正しい知覚」などというものはあるのだろうか？　あるとすれば、それはどういう意味でなのだろうか？

私の緑内障の場合では、残った左眼の視野（右はほとんど欠けている）の一番の問題は、見えるものすべてに霧か霞がかかっているということだ。視力の低下とともに、物体の輪郭がすべてぼやけて見えるようになった。もちろん、物の表面や角が、私の知覚変化につれてぶわぶわ（？）になったり、歪んだりしているわけではない。物の表面を撫でれば分かる。私の場合のもう一つの大きな問題は、中間色の脱色である。総じて色のコントラストが強くないと、色の違いが見分けられない。その結果、白地に黒という普通の印刷物はほとんど読めないので、例えばパソコンやスマホの画面では「色反転」操作によって黒地に白の文字に変えてようやく読み書きができる（このワード文書の画面もそうだ）。だから「素直な」デバイスでは、写真はネガで表示されるし、こちらで

示すバーコードや QR コードは相手が読み取ってくれない（黒白が逆なので）。もちろん、外界の色が実際に反転するわけではないので、依然として私にも空は青いし、木々は緑だ。（余計な話だが、隻眼の剣豪剣士と言われる柳生十兵衛や丹下左膳が、実際に片目だったら、相手との間合いが取れずにすぐ斬られるか、石段かなんかでコケて斬り合いにもならなかったであろう）。

さて、緑内障に限らず眼に不具合があるとされる場合、光学的、生化学的、生理学的、あるいは神経学的に何か「異常な」ことが起こっているのだろうか。もちろん、起こっているからこその「視覚異常」なのだ。しかし、この「異常」は、光学的、生化学的、生理学的、あるいは神経学的な法則に反した事態が生じているという意味ではない。私の眼の場合も、すべては眼球や網膜や視神経の状態に即した事態が「正常に」、という意味は「因果法則に従って」、淡々と生じているにすぎない。つまり、こうした場合、ある事態が「異常」とされるのは、何かある外的な基準と照らし合わせて、それは「通常とは異なる」と見なされるというわけだ。そしてここで「通常」とは、究極のところ、「サンプル数の上で大多数を占める」ということを意味する。例えば、その外的基準は、他人の報告であったり、自分の記憶だったりする。むろん、他人の視覚経験はどれ一つとして自分が文字通りにその内容を知ることはできないのだから、私が知るサンプルは、私と同じような周囲環境下にある他人の言語報告がもっぱらであろう。「ほら、あそこに黄色い花びらが 3 つ見えるよね」。でも、私には 1 つも見えない。もう一つのサンプルケースは、私が記憶している過去の自分の視覚経験である。しかし、これも過去の事物を今見ることはできないのだから、現在の視覚経験を「異常」と判定する基準は、（多分に言語化された）視覚記憶の他はない（もっとも、脳内の関連するニューラル・ネットワークの何らかの再活性化によって、過去の視覚経験のある種の疑似再現も関与しているのかもしれないが･･･）。

そこで、当然のことながら、サンプル数の多数決によって「正常」と「異常」が判定されるわけだから、私の緑内障がもたらす視覚経験がそれ自体として「誤っている」などということはない。とくに、視覚情報の忠実な反映という観点からすれば、私の眼は「偽なる情報」を私に与えているのではない。その視覚情報から、私が花壇の写真を猫のイラストだと判断するなら、そこに初めて「誤り」が生ずる。すれ違うあなたを見分けられなかったり、透明なグラスを見損なったりすることが多くなれば、緑内障は確かにひどく不都合な眼の病だろう。しかし、そのことが意味するのは、「正常」とは「ある目的にとって好都合であって、しかもそれがかなり恒常的だ」ということである。「好都合」でなければ避けた方がいいし、「恒常的」でなければたまたまの幸運にすぎない。不都合な場合も、たまたまの場合も、「正常」な事例とは言われないだろう。ところで、「好都合で恒常的」なのは何にとってなのか？　もちろん、われわれの文脈においては、生物体の生存にとってである。したがって、緑内障などという病は、「人間が生きる上で害となるたまたまの視覚現象」ということになる。繰り返して言うが、ここには、この視覚現象がそれ自体として「誤った視覚である」とか、「偽なる情報を与えている」という意味はまったく含まれていない。

2. 一人称報告（クオリア報告）の訂正不可能性（？）

さて、私の眼の話ばかりで皆さんをうんざりさせてしまい、大いに申し訳ないが、最後にもう一つ、事例として用いるのを許して頂きたい。それは、先日、尾形光琳が描いた「燕子花図」（かきつばたず）を見たときのことである。まことに鮮烈な、素晴らしい屏風絵だと思うが、例によって私には細部がよく見えない。美術館展示の常と

して、全体に薄暗い。照明による絵の劣化を恐れてのことであろう。加えて、天井からの光がガラス面に反射してかえって見づらくなっている角度もある。そのとき私は、「一体、どの位置から、どんな光の下で、この絵を見るのが正しいのだろうか？」と思った。見えにくさが、もどかしかったのだ。

しかし、この絵に対して唯一無二の「正しい見方」なるものがあっただろうか。「掛け軸なぞは美術館じゃなくて、縁側に掛けて見ると絵の凹凸がはっきりして具合がいい」、と言った友人がいる。その妥当性は判断できないが、美術館での鑑賞が必ずしもベストの条件ではない、ということらしい。しかし、よくよく考えてみれば、絵が置かれている周囲環境は、どんなに人工的に操作しても時々刻々変わる。ましてや外からの採光と家の中の照明の組み合わせでは、同一の環境条件というのはほぼ再現不可能であろう。しかし、どの条件下にあろうと、その絵はその絵である。極端な話、暗い倉庫の中でのその絵もまた、その絵の立派な見え姿である。それどころか、見る人の状態もまた時間ごと日ごとに変わるだけでなく、年齢につれて変化する。絵自体にしたって、経年劣化というか、幾星霜も経れば色も抜けていくだろう。つまり、唯一無二の「正しい絵姿」なぞというものは存在しないのだ。あえて言えば、どの絵姿もその絵の「正しい絵姿」である。つまり私が見る「色のはっきりしない、輪郭のぼやけた」燕子花図もまた、紛うかたなきその燕子花図なのである。

これは、感覚知覚報告、とくにクオリア報告はいわゆる「訂正不可能性」（incorrigibility）をもつ、ということなのだろうか。確かに、一人称的に経験された感覚や知覚は、他人の「えっ、そうなの？」という驚きがどうあろうと、また、歯医者が言う「その上の歯の辺りに痛みはないはずなんですけどね」という言葉も何のその、そう感じられたことをどうにも変えようがない。また、自分の記憶が蘇ったときに「あれ、こんなに鮮やかな群青だったっけ？」という思いを、いま改めて見る燕子花図に感じたとしても、今の群青の鮮やかさは、何のせいでそう感じられたにせよ、それ自体変えようがない。

つまり、これらの経験は訂正不可能だろう。しかし、ここには少し概念上の混乱があるように思われる。そもそも「訂正」という行為は、訂正したりしなかったりすることのできるものしか対象にできない。そうした対象は、この文脈では言明、つまり言語表現による主張である。だから、訂正不可能性がよく問題にされるのは感覚知覚経験やクオリア体験に関してであるけれども、実は、「訂正可能／不可能」が意味をなすのは、経験自体や体験自体ではなく、経験言明であり体験言明である。経験自体を訂正するというのは意味をなさない。しかし、それを言語化した主張や報告は「訂正する／しない」の対象たりうる。というのも、ある味覚クオリアの経験を「ブルーマウンテンのような苦みだね」と報告した後で、「いや、正確にはそれより少し酸味が強かった」と訂正するのは、ごくありふれたことだからである。過去の感覚知覚経験にしても、想起の際に初めて言語化した場合などは、後で「でも、それはぴったりの言い方じゃないな」と言って、より適切な単語を捜したりするのは珍しくない。要するに、言明や主張は言語化の産物なので、その言語化の適否に関して訂正の余地が生ずるというわけだ。これは言語化の宿命である。もちろん、言明や主張にしても、「しかじかと言った」という発言の事実、というよりは発話の事実そのものは訂正不可能である。それは経験自体と同じだ。

その昔、一部の現象学者たちは、経験自体や事実自体に完全に密着した言語化、つまり訂正などというクサビが入り込む隙間がないような記述と文法、すなわち「現象学的記述」が可能であり、それを与えるのが現象学の重要な仕事の一つだと考えていたようだが、そんな「特別あつらえの記述」には、これまでお目にかかったことがな

い。そもそも、多くの事例に同じ単語や文法を適用するのが言語表現の本質とも言える制約（と同時に長所）なのだから、それは土台無理というものだろう。したがって、感覚知覚やクオリア経験といった一人称報告に、いま述べた意味での訂正不可能性は存在しない。

であるから、訂正不可能性が存在するとすれば、それは、ある特定の感覚知覚経験の内容それ自体が、別の感覚知覚経験もしくは物理科学的な根拠から「それは違うだろ」、と言いがかり（？）をつけられたときに出現する。例えば、私の以前の発表「物理主義の下での重ね描き多元論（その 1･･･幻覚）」で取り上げた「小さな虎の幻覚」を思い出してほしい。空中散歩している虎の姿は紛うことなく優美だ。その姿があなたの目のまえ数十センチのところに浮かんでいるのは、どうしたって疑いようがない。このとき、その虎を捕まえようと手を伸ばしても、手は空を掴むばかりである。「だから虎が見えているなんて嘘だ、間違いだ」とあなたが自分に言ったとしても何のその、虎の姿が消えることはない。また、物理学者が、虎が見えるという場所に、虎の身体ではなく周囲と同じ空気の流れを描いたとしても、あなたの一人称的知覚世界には依然としてあの虎の姿が描かれている。物理学者が「そこには虎の物理的実在などはないのだから、あなたに虎が見えているはずがない」などと言おうものなら、それは明らかに物理学者の越権行為である。虎の見え姿は、物理的な原因が特定不可能な魔術でも奇蹟でもない。物理的な原因は、恐らくあなたの脳内の腫瘍にある。

3. 感覚知覚相互の関係と物理主義

では、虎の見え姿は立派に存在しているのだから、なぜ人はそれを「実在」ではなく「幻覚」と呼ぶのだろうか？　ここには、一見すると、視覚や触覚や味覚といった、種類を異にする感覚知覚相互の優劣関係があるように思われる。一言でいえば、触覚が最も「実在度」が高く、それ以外の種類は、触覚を確実に導く度合いが下がるに従って「幻覚度」が上がっていくように見える。例えば、音や色や形は、虎の四肢や頭部や歯の手触りや掴み心地の予告であり予兆である限りで、重要な意味をもつように思われるのだ。この点で、臭いや味はもっと重要だろう。しかし、何にとっての重要さなのだろうか？　それは、われわれにとって触覚が生存の要の感覚だからであろう。かつて大森尚蔵は、「触れる触れないこそが命の攻防であり、性と生誕もまた触れる触れないの闘いなのだ」という趣旨の言葉を、どこかに残していたような気がする。だからこそ、音や色や形が与える情報が触覚情報と相容れないとき、それらは、基本、「実在」に対する「幻覚」と呼ばれるのだ。空中散歩している虎は手で掴むことができないし、空耳は虎の吠え声を聞かせるばかりで虎の姿さえ見せてくれないが、あなたに噛みつく虎の歯や顎はあなたに触覚の極限である激痛を与え、場合によってはあなたの生命を奪う。痛みや生命がもし幻覚なら、もはやすべてが幻覚であり、それと対比すべき実在は消滅したことになろう。

と、このようにまずは言えるだろうが、しかし、では逆に、痛みの幻覚は定義上ありえないのだろうか？　そんなことはない。デカルトの昔から、戦場で手足を失った兵士がその失った手足がまだあるのを感じ（幻影肢）、しかもそこに強い痛みを覚える、という事例が多く報告されている。今でも、事故などで手足を失った人がその無いはずの手足に激痛や強い痒みなどを長期にわたって感じ、日常生活上の困難を余儀なくされているケースがかなりある。「幻肢痛」として知られるこの一種の「幻覚」は、いまだに決定的な治療法がないようだ。

これは明らかに触覚的な、あるいは痛みの「幻覚」である。もちろん、だからといって「痛み」が偽物だということではまったくない。それどころか患者は、それが本

物の痛みであるがゆえに苦しんでいるのだ。つまり、幻覚かどうかは、触覚や痛覚と相容れないという基準では片付けられない。そこで、どういう状況なら、幻肢痛は「幻覚」ではなくなるのかを考えてみよう。もちろん、健常な場合は手足に感じられる痛みはそもそも幻肢痛ではないので、ここでの問題にはならない。問題なのは、例えば、人形の腕や、VA におけるアバターの脚にあなたが痛みを感ずる場合、あるいは愛用の自転車のタイヤ、もっと極端には、山道の石仏の内部にあなたが痛みを感ずる場合である。それらは通常のあなたの身体ではない。それらに感ずる痛みは、もちろんあなたの脳が創り出しているのだが、痛みの感覚は真正である。これらの痛みは、あなたがそれらに勝手に「投影」しているにすぎないだろう。しかし、このとき、あなたとこれらの物体もしくは映像との間に、何らかの繋がりがあったとしたらどうだろう？　さらにその繋がりがだんだん濃厚になり、何らかの手段で少しはそれらを操作できるようになったら？　もし本当にそれらの動きや形状を意のままに操作できるようになったら、それらはあなたの新しい身体ではなかろうか。その人形を歩かせる、アバターを喋らせる、自転車を走らせる、石仏に息をさせる（？）、などということができたら、それらはあなたの「拡張された身体」であって、そこに感ずる痛みは通常の身体に感ずる痛みと同格であろうから、それはもはや「幻肢痛」ではないのではないか？　確かに、そう思われる。

しかし「身体」だからといって、そこに生ずる痛みはすべて「幻肢痛」（幻覚）ではない、本物の痛みだ、と言えるだろうか。実は、幻肢痛には、手足の欠損とは逆のケースが存在する。手足が残っていても、神経が決定的なダメージを受けて、（かなり大ざっぱな説明だが）脳と手足をつなぐ一切の神経情報伝達が失われ、手足が全く動かなくなった場合でも、同様の痛みが手足に感じられるケースがある。この場合、この手足を「身体ではない」とは言えないだろう。つまり、身体と見なされる物体に感じられる感覚に幻覚はない、とは言えないのだ。「身体」という妖しくも魅力的な概念に引き寄せても、「絶対に幻覚となりえない感覚」という本質的区分を切り出すことはできない。結局のところ、「身体」という概念は（言いすぎかもしれないが）機能性を本旨とするプラグマチックな概念にすぎないのだから、「身体」を持ち出せば感覚知覚相互の関係や、ひいては「幻覚と実在」の問題が原理的に解決される、ということは期待できない。「身体」は、「妖しい」分だけ「怪しい」概念なのである。

では、こうした問題をどう考えたらいいのだろうか。ここで、こうした現象のすべてが物理的基盤の上で生じていることを思い出そう。「物理主義と重ね描き多元論」からすれば、幻覚であろうとなかろうと、すべての感覚知覚経験は一人称的な知覚世界の中に描かれる。上で取り上げた２つの幻肢痛の場合では、視覚的に見えない手足に痛みが感じられるか、あるいは視覚的に見える手足に痛みが感じられる。いずれも感じられる痛みはリアルであるが、それらを共に「幻覚」だとするのは、それらに重ね合わされる物理描写の中に理由がある。第１の場合では、痛みが感じられる場所にはふつうの空気の物理描写しか与えられない。もちろん、その空気の塊と脳の痛覚神経はつながっていない。そして、当人の脳には痛みに特有の神経興奮が描かれる。第２の場合では、手足の場所にタンパク質や血液など肉体を構成する生理的素材が物理的に描かれるが、しかし、それらのいずれの部分とも脳の痛覚神経はつながっていない。そして、やはり当人の脳には痛みに特有の神経興奮が描かれる。いずれの場合も、痛みの原因は脳だけにあり、それは「虎の幻覚」の場合と同様である。

では、先に触れた「拡張された身体」の場合はどうか？　人形の腕や、VA におけるアバターの脚、愛用の自転車のタイヤ、山道の石仏に感じられた痛みは、それらを何らかの仕方で操作できるとしても、物理描写のレベルでそれらがあなたの脳の痛覚

神経と因果的に結ばれていないならば、上の「幻肢痛」の第２の場合と同じである。もちろん、その因果的つながりは、生理学的ではなく、デジタル信号に依るものであっても構わない。しかし物理描写において、そのつながりは一過性の「偶然的一致」ではなく、安定的な「因果連鎖」として描かれていなければならない。そうでなければ、結局、脳で生じる例の神経興奮は、「虎の幻覚」の場合と同様に脳内の出来事であるにとどまる。科学哲学者のライヘンバッハが昔どこかで述べていたように、戦争映画の爆発シーンと同時に起きた観客席の震動は、当の映画ではなく、その地方をたまたま襲った地震によるものであった。この２つの出来事の間には「偶然的一致」があるだけで、映画の上映と観客席の揺れの間に、震動を生じさせる「因果連鎖」は存在しない。したがって、さらに、痛覚神経（いわゆるＣ繊維）を除く他の神経系（運動神経など）と「拡張された身体」がたとえ因果的に安定的に結ばれていたとしても、痛みを生じさせる因果連鎖は存在しないのだから、あなたが感ずる痛みは幻肢痛の一種であり、「幻覚」である。それは、釘を踏み抜いた友人の血まみれの足にあなたが突然に感ずる「痛み」と基本的には変わらない。

4. 重ね描きによって一人称的世界を抜け出せるか？

物理描写との重ね描き、あるいは他人の感覚知覚描写との重ね描きによって、私は自分の一人称的世界から抜け出し、「三人称的な感覚知覚描写」に到達する（経験する）ことができるのだろうか？　結論から言えば、それは不可能である。「三人称的感覚知覚描写」が（ここでの概念枠組みからすれば）語義矛盾だということからしても、それは明らかであろう。例えば、他人が感ずるクオリアをあなたが文字通りに経験することができないように、他人の感覚知覚描写を文字通りにあなたの描写とすることはできない。あなたが重ね描く多元的描写には少なくとも、(1)物理描写、(2)感覚知覚描写、(3)価値描写（道徳／宗教／美）の３種類があるように思われるが、後で述べるように、そのうち文字通りに他人と共有できるのは物理描写だけであって、他の描写は経験主体の数だけ存在する。（なお、この最後の価値描写に関しては、「物理主義と重ね描き多元論（その３）」で論ずることにしよう）。

さて、この重ね描き多元論的状況を、「主観的世界」や「客観的世界」という従来の哲学用語で言いかえればどうなるだろうか？　結局、人は各人の主観的世界に閉じ込められていて、客観的世界を知ることはないのだろうか？　しかも、それは他者が主観としては登場しえない独我論的世界ではなかろうか？　ある意味では、答えはどちらも「その通り」である。しかし、そう心配することはない。

まず、重ね描きの一つ、各人の感覚知覚描写をつなぎ合わせて１枚の巨大な、万人共通の感覚知覚描写を作ることはできない。各人が、それぞれ世界全体の感覚知覚描写をもつ他はない。そもそも、他人が持つ感覚知覚描写が正確にどのような質のものであるかは自分には決して分からない（他人の経験するクオリアを考えてみればよい）。むしろ、感覚知覚世界の留め金（結節点）となる素朴物理学的物体や、各人の身体物体を錨として、各人の描写が重ね合わされる。他人の感覚知覚描写が自分のそれと同じ留め金に引っかかっているかどうかは、物体に関わる他人との共同作業や言語によって確かめるしかない。もちろん、それも各自の描写の中でのみ、つまり各自の一人称的世界の内部においてのみのことであるが、ここで無益な哲学的懐疑論に悩まされなければ（つまり日常的には）、何の特別な問題も生じない。私の視野に現れている重いテーブルをあなたと共に運び、あなたの「手が痛い」という訴えにあなたの感ずる痛みを想像する。われわれ２人は、同じ客観的世界に住んでいるかのようだ。そ

う思うことに、ふつうは何の問題もない。ただ、重ね描き多元論からすれば、経験の主体の数だけの感覚知覚描写が重ね合わされ、一人称的空間が重ね合わされている、というにすぎない。残念ながら、同一の客観的な感覚知覚空間というものは存在しない。だが、本当に「残念」だろうか？　何が「残念」なのだろう？

右大脳半球の損傷により「半側空間無視」の症状を呈するようになった人にとって、乱暴に言えば、片側の空間全体が失われている。その結果、無くなった空間にある事物は存在しないものとなり、例えば、お皿に盛られた料理も半分は食べ残してしまう。このとき、客観的な視覚空間が存在するとすれば、静的に眺められた限りでの私の視覚空間と、その人の視覚空間のどちらが客観的視覚空間だろうか。両方とも客観的空間だというのは、「存在すると同時に存在しない」という矛盾した特徴を客観的空間の一部に関して主張することになるので、受け入れられない。では、その人の視覚空間と私の視覚空間のどちらが、客観的空間なのだろうか？　恐らく生活上や治療上の便宜から、「その人の視覚空間が客観的であって、その人によって無視された空間部分（残された半分の料理）は私の幻覚だ」、とするよりは、「私の視覚空間が客観的であって、その人は客観的空間の一部を欠いている」、とされるだろう。しかし、すでに何度も論じてきたように、正しくは「客観的視覚空間なるものは存在しない」ということなのだ。存在するのは、重ね合わされる２枚の視覚記述、２つの視覚空間である。それで何の不都合があるかを、よくよく考えてみてほしい（スポイルされるのは客観性への哲学者の妄執か？）。むしろ大事なのは、われわれの世界が独我論的状況にあらざるをえなくとも、その中に出現する他者に対してわれわれがどういう「態度」をとるかである。他者は、その身体物体が客観的（三人称的）世界の一員だという理由で「他者」なのではない。私の一人称的世界に登場する（私に似た）身体物体は、客観的世界に属するという特徴によってではなく、その身体物体に対する私の「態度」によって「他者」なのだ。その「態度」とは、「自分と同様に不可侵で共有不可能な一人称的世界をもちながらも、その世界の見通しがたさ故にこそ尊重すべき自律性と自由をもつ者」、すなわち「素朴心理学的説明の使い手であると同時に説明の対象となる者」として、その存在者を認めることである。つまり、この「態度」に無縁の者こそが、本当の独我論者である。

さて、では、重ね描きを持つすべての経験主体に共通する世界は存在しないのか。存在する。それこそが、物理描写が他の描写に重ね描く「物理空間」である。なぜなら、物理描写はすべての人にとって同一内容の１枚だけしか存在しないからである。というのも、物理描写は概念一般（観念、思考内容、図表）、とくに数概念、空間概念、質量概念などによって構成されているからである。したがって、他者と文字通りに共有できるのは物理描写だけであろう。ここで、共有するとは、同一の概念内容を理解することであって、同じ理解に達しているかどうかは言語や図表によるコミュニケーションによって確認する他はないが、重要なのは、同一の理解をもつことができる、ということだ（実際には理解の程度は人により様々であっても）。つまり、推奨で

きない言い回しだが、物理空間を感覚知覚空間（一人称的空間）として生きる（経験する）ことはできるが、物理空間を物理空間として生きる（経験する）ことはできない。

したがって、物理描写は、物理学が与える描写であるから、それを与える者の視点には依存しない。言わば、無視点的描写であり、特定の感覚知覚描写や価値描写（／幻覚描写）の内容には関わらない。また、その描写は、有形だろうと無形だろうと、すべての物理的存在と物理的性質を網羅する。私が前提するタイプの物理主義の下では、それらが構成する物理的事実の上に他の一切の事実がスーパーヴィーンする。すなわち、物理的事実によって、クオリアや知覚の有り様、また素朴心理学的事実や制度的事実などのすべてが決定される。もちろん、これは、われわれの現実世界（という一つの可能世界）についての存在論である物理主義の主張であって、認識論的な「証明」はできないし、物理学を初めとする科学によって「説明」されるわけでもない。むしろ、すべての科学的説明の前提を「説明」するものである。したがって、このことを含めて、現実世界がどういうタイプの物理主義的世界かという主張は、科学と常識の全体をそれがいかにうまく説明する描像となっているか、という哲学的試みとしてしか正当化できないだろう。

それはさておき、最後に、この物理描写が与える多元的重ね描きのイメージを確認しておこう。私の感覚知覚描写において、自分の身体物体や、私の前のテーブルや、その上を空中散歩する小さな虎や、あなたの身体物体や、あなたの食べ残した料理の半分などが描かれる。あなたの言うところに従えば、あなたの感覚知覚描写においては、自分の身体物体や、自分がすっかり食べた料理皿や、私の身体物体はあるが、空中散歩する虎どころか、私の前のテーブルすら描かれていない。その２枚の感覚知覚描写に重ねて描かれる物理描写では、ここで想定されている場合、私の脳には腫瘍を、テーブルには物理テーブルを、テーブルの上方にはただの空気を、あなたの脳には右半球損傷を、そして料理皿には半分残った料理が（もちろん物理的に）描かれる。こうして、感覚知覚描写の和だけの重ね描きの上に、１枚だけの同一の物理描写が重ね描かれるのだ。

視点のまったくない描写とは、言わば神の視点による描写でもあろうか。それが描き出す空間、物理空間を一種のプールのようなものと考えれば、その中を幾つかの「特殊な物体」が泳いでいる。その各々が自分の感覚知覚描写を主張し、一人称的知覚空間を展開する。しかし、物理学と物理的出来事のすべてを完璧に知ってはいるがそれ以外はまったく何も知らず、自分の一人称的経験も持たないような、そんな「愛とも美とも無縁な物理オタクの神」がいたとしたら、その神にとって、それらの「特殊な物体」が描く感覚知覚描写がどのようなものであり、どのような一人称的空間が物理空間に重ねられて広がっているのかを知る術はない。ただ、もしそのような一人称的世界をもつ者が物理描写を知ったなら（スーパーヴィーニエンスに関する暗黙の

想定の下で)、他の「特殊な物体」(身体物体)の所有者が経験するクオリアや知覚経験を予想することはできるだろう。もちろん、それは、「同じような状況では同じようなことが生じているだろう」という、自分の経験と物理描写との「対応」を頼りにしただけの「勝手な外挿的予想」にすぎない。というのも、くどいようだが、他人の一人称的世界の内容を自分のものとして経験することは不可能だからだ。また、もう一つ付け加えておけば、他人の感覚知覚描写の主張を根拠に物理描写がどうなっているのかを確実に知ることもできない(たとえスーパーヴィーニエンスが成り立っていたとしても、下から上の決定性は保証されるが、その逆は保証されないからである)。

これが、重ね描き多元論における描写相互の関係の一端である。そして、われわれ人間にとって最も特徴的で、最も重要なことの一つは、最後に重ねられる描写が道徳や宗教や美を描く「価値描写」だという点である。これについては、次回「その３」に譲ることにしよう。

「その 3」の予告を兼ねたおまけ。

「幻覚」の定義の試み(1):

幻覚とは、物理記述において対応する物理的存在や物理的性質、あるいは物理的出来事が描かれていないにも拘わらず、感覚知覚記述や価値記述において描かれた物体や性質、あるいは出来事のことである。

「幻覚」の定義の試み(2):

幻覚が生ずるのは、感覚知覚記述や価値記述において物体や性質、あるいは出来事が描かれているにも拘わらず、物理記述において対応する物理的存在や物理的性質、あるいは物理的出来事がそれらに重ね描かれていない場合であり、その場合に限られる。